

Title	Lewis Spence; An introduction to mythology
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.348- 349
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0348

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かつて仲間へ傳へたのであるがその由來は不明であるが、幸ひに之によつて知られる事は在來の史料と別種な然も價值に於て少しも違はぬ古代生活の *Survivals* が今日もなほ民話或は民間行事等の形に於て僻村の間に傳へられ、同情ある採集者の手を待つておることを一事である。

(松本信廣)

Lewis Spence ; An Introduction to
Mythology. London, 1921.

神話は古代民族及び原始民族の信仰、人生觀、及び世界觀の綜合であると言つていい。これをもつて彼等は自己の起源と光輝を語りんとする。それ故にづれの古代民族の歴史も神話をもつて始まるのである。すくなくとも多少の神話的色彩をおびざるはない。従つて古代文化史研究にあつて神話の占むる地位は第一にきたるものであらねばならぬ。しかるに多くの人々は神話研究を等閑にするが故に、史實として解すべからざるものをも史實となし、甚しきはすべての物語をそのまま事實とみんとする。かかる傾向は、自國の神話、歴史の研究にあつて殊に著しくあり、素朴歴史家の常に陥りやすい危険である。この危険をさげるためには、まづ神話學の知識を必要とする。即ち神話の性質、起源、發展、種類等についての一般概念を得ねばならぬ。この要求に應ずる最近の好著として、スペンズ氏の神話學概論を紹介したい。

學問に定義をくだすことは、その學問の研究に甚だ至便であり

必要であるが、また同時に至難である。ここに神話學のこゝきは、比較宗教學、民俗學と密接なる關係を有し、従つて往々混同されその區別も曖昧となるのであるが、本書の著者は、神話學をもつて、かつて行はれた信仰であつた原始的もしくは初代の宗教研究でありとなし、民俗學をもつて、今なほ行はれてゐる原始的宗教及び風習の研究となした。従つて神話學は宗教學の一部をなすのである。けれども神話、及び神話學の見解は、從來人により時代により區々として一定しない。ギリシヤの Xenophanes (B.C. 540 - 500) より今日にいたるまで多くの變遷をなしたのであつて、Max Müller, Sir E. B. Tylor, William Robertson Smith, Andrew Lang, Sir James George Frazer 等其他最近にいたるまでの神話學者の見解に對して、著者は一々紹介批評をなしてゐる。今日に於いては、言語學派の見解はもはや信じられないものであり、また人類學派の見解も雖もことごとく是認することを得ない。ことに神話が宗教的性質を有するや否や、また神話と儀式とはいづれが最初の起源なりや等の問題は、Lang や Smith によつて論議されたのであつて、Lang は宗教と神話とを嚴密に區別し、スミスは神話が儀式を説明するために作られたものとするのであるが、今日の學者は、神話はその性質において大部分宗教的のものであること、また神話がその起源において儀式に先立つのであるが、たゞ副次的意味のものが儀式より由來したることを信するのである。しかし著者が從來の諸學者を批評するにあつて、いささか不満を感じるのは、民族心理學を大成して神話に對し獨特の見解を

下したるヴントのごとき學者を逸してゐることである。われらは神話研究にあつて、ヴントの見解のみに依らんとするのではない。けれども神話に對して彼の與へたる心理學的解明は、從來の諸説に比していちよるしい特色を示し、特殊の價值を有するのであつて、従つて彼の神話學上における地位は、到底看過するを許されないものと信ずる。而してこれと關係して、本書全體に對しても、ヴントの民族心理學ほど透徹したる解明を與へられない點に、或る不滿をおぼえるのである。例へば神の進化において、靈魂觀念が基礎となつて物神、トーテム神、祖先神等が発生するとなすのであるが、その間の發展過激及び相互の關係などに關してもつと明確なる説明を要求したいのである。

以上のごとき不滿を感じるものの、しかしその取扱へる材料の豊富なること、その研究法の比較的公平なることは、本書の特色である。著者が、神話研究にあつて言語學派、人類學派、乃至太陽神話學派、植物神話學派等の一方のみに偏することなく、あらゆる合理的方法を用ひんことをすすめてゐるのは正しい。なんとすれば言語學派は、あらゆる神を言語學上より説明し得るとなし、太陽神話學派はすべての神を太陽神に關係せしめ、植物神話學派は、一切の神を植物に起源せしめんとするの危険に陥るからである。材料の豊富なることは、本書をして一見神話の辭典らしき觀を呈せしむるのであるが、このことは、著者が大英國王立人類學會の會員であつて、“A Dictionary of Mythology,” “A Dictionary of Non-Classical Mythology” 其他々々神話等の著者

ことを思へば、首肯されることである。それにもかかはらず、日本神話の黄泉の主宰神を Enmao (ニミヤ王のことであらうが、これは佛教)となし(われらはイザナミノミコとなす)、人民に文明を教へたる神を Okikurumiとなし(これはアイヌの神であつて、日本神話においてはオホクニヌメノミコであると信ずる)、また古事記原形の誦傳者を女官 a Court lady の Hyeda No Ra Rae (稗田阿禮の讀み方としては實にをかしい)としてゐるごときは、われら日本人には最も意にみたぬものである。かかる點からみても、日本神話は日本人自身によつて研究さるべきことを思はしめらる。しかるにわが國において、從來神話學として知られたる書は、高木敏雄氏の比較神話學あるのみである。泰西における斯學の發達は、最近において殊にいぢぢるしく、さかんに論議をたかばしてゐる。例へばギリシア神話の戀愛と美との神 Aphrodite (ローヴの Venus と同神)は、Dr Rendel Harris によれば本來はマンダラ草であつたと言ひ、これに對して Professor Elliot Smith は、その原形は子安貝であつたと論駁してゐる。また或る論者に從へば、Apollo は本來林檎であり、Bacchus は常春藤の小枝であり、Zeus は燧石の物神であつたと言ふ。かかる最近の研究を基礎としてなれるスペンス氏の好著を思ふにつけても、この方面におけるわが學界の不振を悲まざるを得ない。

終りに本書の組織を示せば、第一章緒論、第二章神話學の發達第三章神の進化、第四章神の種類、第五章神話の分類、第六章宇宙開闢神話、第七章極樂と地獄、第八章民俗と神話、第九章儀式と神話、第十章神話の記録的資料、第十一章世界における大神話組織の本文三二五頁の大冊である。(松本芳夫)